

# 国民体育大会が青少年に与える教育的効果に関する調査研究

神野賢治\*

山本浩二\*\* 谷口勇一\*\*\*

## 抄録

国民体育大会（以下、国体）は、戦後間もない我が国において、スポーツの普及や地方文化を発展させ、国民の生活を豊かにすることを第一義に1946（昭和21）年から2012（平成24）年岐阜国体までに67回の開催を重ねている。長期にわたり継続されている我が国最大のスポーツイベントといえよう。しかし、その存続には様々な問題が内包しており、二巡目を迎えた1988（昭和63）年前後より、国体のあり方が再び問われ、近年では“不要・廃止”論が繰り返し議論されるまでに至っている。これらの課題解決にむけては、実証的かつ縦断的な調査による検討が不可欠となる。

そこで、本研究では、国体をめぐる各種課題のうち、「国体開催が地域住民に与える影響」に焦点をあてた。開催地住民の中でも対象としてあまり特化されていない「青少年」、すなわち、小学校・中学校・高等学校の児童・生徒を対象とし国体に対する意識に留まらない教育的な効果について言及することを目的とした。

方法としては、2012年9月下旬から10月上旬に開催された第67回国民体育大会（ぎふ清流国体）開催に関わる岐阜県内の小・中・高等学校に通う児童・生徒を対象としたアンケート調査やインタビュー調査を実施し、補足的に一部の児童・生徒の保護者にもアンケート調査を実施した。

分析の結果から、国体開催の児童・生徒は、国体に関わることで運動・スポーツへの興味関心や実践行動、体育の授業に対する志向性、現在住んでいる地域（開催地域）に対する愛着心などを高めることが示唆された。

また、国体の教育的な効果の新たな指標として掲げた「社会性」の獲得については、児童・生徒の練習や準備から本番までの満足感や、国体の各種印象度などが高まることで、社会性の獲得に何らかの影響を及ぼし、日常生活に変化を与えることが予想される結果となった。

キーワード：国民体育大会，スポーツイベント，青少年，教育的効果，社会性

\* 金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科 〒920-8620 石川県金沢市御所町丑10番地1

\*\* 津山工業高等専門学校 〒708-8509 岡山県津山市沼624-1

\*\*\* 大分大学教育福祉科学部 〒870-1192 大分県大分市旦野原700番地

# An Empirical Study on the Educational Effects of National Sports Festival for Young People

Kenji KAMINO \*  
Kouji YAMAMOTO\*\* Yuichi TANIGUCHI\*\*\*

## Abstract

The National Sports Festival, which was started in 1946, has been held annually as a nation widespread festival for promoting sports broadly throughout the nation. It can be called the greatest sports event in our country currently continued over the long period of time.

However, it has been indicated that there are many problems regarding management and operation of the festival, recent years, it is said that unnecessary.

Therefore, empirical and continuous study about National Sports Festival is indispensable towards the solution to problems.

Purpose: The purpose of this study was to investigate the educational effects of National Sports Festival for young people. For example, affect exercise and sports activity, the physical education class behavior and its related factors, including sustainability of effect after the festival term.

Methods: All of data was obtained through questionnaires distributed to 9 schools in Gifu-city (1024 students who participated in National Sports Festival). Their questionnaires were consisted of consciousness for sports, study done in a school, loyalty to their area and scale for measuring the sociability.

Results & Conclusions: The main results were summarized as follows :

- 1) The students was to be concerned with National Sports Festival, and the interest for exercise and sports increased.
- 2) The students came to like the physical education class and the area that lived in, participating in National Sports Festival.
- 3) In the score of sociability, affect group is significantly higher than non -affect group in satisfaction and impression of National Sports Festival. Affect group could get “pleasure”, build “friend” relationships and have a“pleasant daily life”than non-affect group.

Key Words : National Sports Festival, Sports Event, Young People,  
Educational Effects, Sociability

---

\* Kanazawa Seiryō University  
10-1 Ushi Goshō-machi, Kanazawa-City, Ishikawa, 920-8620, Japan  
\*\* Tsuyama National College of Technology  
624-1 Numa, Tsuyama-City, Okayama, 708-8509, Japan  
\*\*\* Oita University  
700 Dannoharu, Oita-city, 870-1192, Japan

## 1. はじめに

国民体育大会（以下、国体）は、戦後間もない我が国において、スポーツを通じた「復興」や「ナショナリズムの高揚」を一義に、1946（昭和21）年、京都府を中心とする京阪神地域で第1回目が開催された。

その後、全国都道府県の持ち回り開催を経て、1987年の第42回沖縄国体で一巡した。二巡目は再び京都国体から始まり、2012年岐阜国体で67回目を重ねており、長期にわたり継続されている我が国最大のスポーツイベントといえよう。その視座には国民の生活を豊かにすることがあり、＜スポーツの普及＞、＜スポーツ精神の高揚＞、＜国民の健康増進・体力向上＞、＜地方文化の発展＞といった目的が達成されることに期待が寄せられてきた。

しかし、その存続には様々な問題が内包しており、二巡目を迎えた1988（昭和63）年前後より、国体のあり方が再び問われはじめ、近年では国体“不要・廃止”論が繰り返し議論されるまでに至っている。その論点は、主に①運営費の肥大化・大規模化による地方財政の圧迫、②勝利至上主義や県勢・県威の誇示からなる“開催県優勝”をはじめとしたシステムの恒常化などに集約される。また、①においては費用だけではなく、開催都道府県は様々な準備を経て本番を迎えることになる。そのうち、人的動員として、国体関連の企画・運営・事務作業を行う自治体職員や、いわゆる「マスゲーム」と呼ばれる各種式典時のオープニングアトラクションをはじめとした集団演技者、ボランティアスタッフ、競技会補助員などに、地元の小学生や、中・高校生が多数動員されている。特に、マスゲーム参加による学校教育現場への影響力が問われており、子どもの体育嫌いの増加や欠課の続出、国体への参加・不参加の選別などが問題視されているのである。

これらを背景に、財団法人（当時）日本体育協会は、2003（平成15）年に「国体改革2003」と銘打ち国体の今後のあり方に関する提言骨子をまとめているが、上述のように、国体をめぐる課題は多岐にわたり複雑化しているため、その解決には実証的かつ縦断的な調査による検討が不可欠となろう。これまで、国体に関する先行研究は数を増やしているが、選手の強化・パフォーマンスの向上、ドーピングやトレーナー制度を含む競技団体のあり方などを論点とするものが多く、国体自体の意義や社会現象に検証を施した研究は数少ない。

なかでも、岡本ら（1986）は滋賀国体に際し、開催3年前、1年前、1年後にわたる調査から、国体に対する住民意識を時系列で捉えている。川村ら（1985）は、国体の集団演技（ダンス）に参加する家庭婦人の参加構造と、その後のダンス観の変化を

考察している。また、千葉（1987）や田中（1988）は開催県優勝の要因や天皇杯順位を数量化するなど、国体のシステムを分析した。原田ら（1992）は、同じく開催地住民を対象に、一巡目から二巡目への転換期に焦点化した調査の結果、「国体開催により住民のスポーツ活動に対する好感度は高まった」とし、今後の国体の役割として生涯スポーツの振興・推進を挙げた。一方、仲野ら（1996）は上述の国体に関連する研究の課題点を指摘している。すなわち、「実態報告に留まる傾向」が少なからずあることや、「調査時期」が3年前以降から開催直後という時期に集中していることである。特に「調査時期」については、開催直前後は、住民の意識も高いことが予想され、この時期における地域住民の国体に対する意識を捉えることには疑問の余地が残るとしている。これらについて、権（2006）も、国体開催前後の意識比較は、当然ある程度の変容をみせるという視点から、調査法や調査時期、国体に対する意識だけに基づく分析ではなく、内容をより検討する必要性を明示している。

よって、本研究では、国体をめぐる各種課題のうち、「国体開催が地域住民に与える影響」に焦点をあてる。住民意識以外の内容や調査時期の検討を念頭に置きながら開催地住民の中でも対象としてあまり特化されていない「青少年」、すなわち、小学校・中学校・高等学校の児童・生徒を対象とし、国体に対する意識のみに留まらない教育的な効果について言及する。

## 2. 目的

本研究の目的は、国体開催県の児童・生徒達が通常の“体育”や学校活動とは趣を異にすることとなる諸活動において、“教育的効果”の有無やその具体的事例について明らかにするものである。

また、上記を客観的に評価する指標として、一部の児童・生徒の保護者に対する調査を実施する。具体的に検討する事柄は以下の通りである。

- 1) 児童・生徒の「体育・スポーツ」に対する各種意識の変化、運動・スポーツ活動の変化
- 2) 児童・生徒の「地域」に対する意識の変化
- 3) 児童・生徒の国体関与に伴う「社会性」の形成

## 3. 方法

2012年9月29日（土）～10月9日（火）に開催された第67回国民体育大会（ぎふ清流国体）開催に携わる岐阜県内の小・中・高等学校に通う児童・生徒を対象とし下記の調査を実施した。

調査内容や対象者（校）の選定ならびに実施においては、ぎふ清流国体推進局総務企画課（岐阜県庁内）の全面的な協力を頂いた。

- 調査① 岐阜市内在住の児童・生徒に対するアンケート調査
- 調査② 岐阜市内在住の児童・生徒に対するインタビュー調査
- 調査③ 国体に関与した児童・生徒の親に対するアンケート調査

### 3-1. 仮説の設定

先行知見から以下の5つの仮説を設定し検証する。

- 【仮説1】国体との接点が高い児童・生徒ほど、運動・スポーツに関する各種意識が高い。
- 【仮説2】国体との接点が高い児童・生徒ほど、体育や学校での勉強に対する意欲が低い。
- 【仮説3】国体との接点が高い児童・生徒ほど、地域に対する愛着心が高い。
- 【仮説4】国体との接点が高い児童・生徒ほど、社会性の獲得度が高い。
- 【仮説5】国体に関与した児童・生徒は社会性が高まり、日常生活に活かすことができる。

また、上記の仮説1、3、4、5を本研究では国体が児童・生徒に及ぼす“教育的効果”として捉え、以降の分析作業を行う。

### 3-2. 児童・生徒に対するアンケート調査【調査①】

岐阜県では第67回国民体育大会の開催にあたり、「県民総参加、県民協働による手づくりの大会」を第一目標とし、県民の一人ひとりが国体のために何ができるかを考え、自発的に行動することにより、県民総参加、県民協働による手づくりの大会運営に万全を期する指針を掲げた。

よって、岐阜県内に在住する児童・生徒においては学校を単位に国体開催をバックアップする活動に全員が関わる方策がとられており、全く関わっていない児童・生徒を選定することは困難であると判断した。活動は多種多様にあるが、主に「式典やイベントにおける演技」、「音楽隊（吹奏楽）」、「競技補助員」、「学校でのおもてなし活動（花の栽培、都道府県応援団、授業時間を使い各自での応援など）」、「運営・設営等のボランティア」、そして「選手」などが挙げられる。

本研究では、上述の参加形態を「選手」、国体との「関わりが多い児童・生徒」（以下、関与強）、「関わりが少ない児童・生徒」（以下、関与弱）の3類化し、調査・分析の対象とした。

岐阜県内の学校から調査協力の承諾が得られた9校（計1,075名）の児童・生徒を対象にアンケート調査を実施した（図表1）。

アンケートの配布・回答・回収は各学校長の指示のもとに、学級単位で実施され、最終的に1,024名（平均年齢12.3歳、SD=2.581）から有効回答が得られた（有効回収率95.2%）。

調査は先行知見から開催前後や期間中ではなく、一定の期間を置き、本大会終了から約4カ月後の1月下旬に実施した。

#### <主な質問内容>

- ①基本的属性に関する5項目（氏名、性別、年齢、国体への参加形態）

図表1 調査対象者の内訳

参加形態区分	学校	対象者			平均年齢 (歳)	活動の内容
		男性	女性	計		
選手	A 高等学校	33	18	51	17.6	野球(8)、陸上競技(9)、競泳(7)、テニス(3)、飛び込み・シンクロ(1)、男女バレーボール(11)、ハンドボール(2)、卓球(2)、馬術(1)、男女バドミントン(5) 少年の部に出場
	B 高等学校	0	29	29	17.4	バスケットボール少年女子に出場
	C 高等学校	10	3	13	17.5	男子ホッケー(9)、弓道(3)、山岳(1) 少年の部に出場
	D 高等学校	0	30	30	17.1	アイスホッケー少年女子に出場
関わりが多い 児童・生徒	E 小学校	70	79	149	10.8	式典前演技
	F 小学校	64	60	124	10.8	都道府県応援団、学校でのおもてなし活動
	G 中学校	57	76	133	13.7	都道府県応援団、学校でのおもてなし活動
関わりが少ない 児童・生徒	A 高等学校	10	56	66	16.3	式典前演技
	H 小学校	50	62	112	10.9	学校でのおもてなし活動
	I 小学校	161	156	317	10.8	学校でのおもてなし活動
計		455	569	1024		

※ 小学校児童は4年生以上を対象とした



## ②社会性測定に関する 16 項目

社会性の測定尺度においては、山本ら（2013）が構成した「高校生版社会性測定尺度」を援用した（図表 2、筆者も開発に参画）。探索的因子分析による因子構造の検討からステップワイズ因子分析を用いた因子分析モデルの適合性の検討がなされ、適合度指標として用いたすべての因子（GFI、AGFI、CFI、RMSEA）において高い適合度が得られたものである。尺度全体の因子構造の妥当性も確認され高い信頼性・妥当性を備えていると考えられる。

- ③国体に関する 10 項目（充実感、練習会や講習会に対する意識、国体に対する興味関心の変化、家族・友人との対話の変化、国体の各種印象度など）  
④学校や課外活動に関する 7 項目  
⑤岐阜県や住んでいる地域に関する 3 項目

図表 2 社会性測定尺度(山本ら、2013)

項 目
<b>意思表示 (<math>\alpha = .80</math>)</b>
1 人前で大きな声で、はっきりとした口調で話すことができる
23 何事も自ら積極的に行動しようとする
48 性別や年代に関係なく、一緒に話をするすることができる
56 自分には、まわりを励ましたり、元気づけたりする明るさがある
Fit index: GFI=.997 AGFI=.985 CFI=1.00 RMSEA=.000
<b>目標遂行 (<math>\alpha = .74</math>)</b>
11 自分の立てた目標を目指して行動することができる
41 物事を実行する目的を明確にしている
24 自分の目標が、何を、いつまでに、どれだけ達成するのかわかっている
35 自分のやりたいこと(職業)を意識して、進路設計している
Fit index: GFI=.997 AGFI=.987 CFI=1.00 RMSEA=.000
<b>対人関係 (<math>\alpha = .72</math>)</b>
12 仲間と意見交換し、協力することができる
4 他人が困っているときは、助けてあげたいと思う
16 他人の良いところは自分にも取り入れたいと思う
33 助言をしてくれる人たちを持っている
Fit index: GFI=.997 AGFI=.985 CFI=1.00 RMSEA=.000
<b>創意工夫 (<math>\alpha = .73</math>)</b>
27 他人の批判を受け入れ、自分の改善に取り入れる
39 多少気の合わない相手でも、協力して物事を行える
52 別の方法はないかとあらゆる可能性を探ろうとする
20 なるべくまねではなく、創意工夫したい
Fit index: GFI=.996 AGFI=.980 CFI=1.00 RMSEA=.000

## 3-3. 児童・生徒に対するインタビュー調査

## 【調査②】

アンケート調査結果から、児童・生徒の各種意識についてより深層かつ補足的に分析する作業としてインタビュー調査を実施した。主にアンケート調査の回答から国体との具体的な接点や、個人への影響を確認することを目的とした。対象については、次章を参照。

## 4. 結果及び考察

## 4-1. アンケート調査結果

## 1) 運動・スポーツに対する意識

現在（国体終了から約 4 カ月後）の運動やスポーツに対する意識について、国体が「とても影響している」「まあまあ影響している」と回答した者は 492 名（48.0%）であった（図表 3）。参加形態別にみると、「「する」「みる」どちらも好き」は「選手」が 87.4%と最も高く、次いで「関与弱」62.4%であった。一方で、「関与強」では、「どちらかといえば「する」方が好き」28.3%、「どちらかといえば「みる」ほうが好き」21.7%と、運動・スポーツの嗜好性に違いがみられた。「関与強」の児童・生徒は、開会式における式典前演技で、組み立て体操などを練習から本番まで実際に自身で身体を動かす機会もあり、また、おもてなし活動では各県選手団への応援アピール（特製の横断幕や各県をパネルで紹介）などの経験が影響しているとも捉えられる。後者の活動については、「関与弱」の児童・生徒も該当するため「みる」スポーツを嗜好する傾向が確認できる。

全体では、国体によって運動・スポーツ（「する」「みる」両方）がきらいになるという意識はごくわずかであった。

図表 3 運動・スポーツに対する意識(参加形態別、%)

	「する」「みる」どちらも好き	どちらかといえば「する」ほうが好き	どちらかといえば「みる」ほうが好き	「する」「みる」どちらも嫌い
選手(n=87)	87.4	8.0	4.6	0.0
関与強(n=240)	49.2	28.3	21.7	0.8
関与弱(n=165)	62.4	17.6	19.4	0.6

↓  
国体の影響を受けていると感じている児童・生徒 492名 (48.0%)

## 2) 学校の勉強・体育に対する意識

学校での勉強に対する意識について、国体が「とても影響している」「まあまあ影響している」と回答した者は 289 名（28.2%）であった（図表 4）。

“選手”の約 4 割は「好きではない」という傾向にあることが確認できる。過去の開催事例からしても、強化合宿等により欠課が重なり、国体終了後に授業についていけないため学習意欲が低下するという報告（神野、2008）に符合する結果となった。

また、「関与弱」の児童・生徒においても 2 割程度が「好きではない」傾向にあることも看過できない点であろう。一方で、「関与強」の児童・生徒は「好き」である傾向が最も高いことが確認できた（87.1%、「とても好き」「まあまあ好き」の合算）。

体育の授業に対する意識については、国体が「とても影響している」「まあまあ影響している」と回答した者は 447 名（43.7%）であった（図表 5）。

最も国体を通じ、好きになったと確認できるのは「選手」75.8%であるが、全体的に体育の授業に対しては意欲的な意識を持っている事が確認できる。

参加の形態を問わず、国体によって「あまり好きではない」や「まったく好きではない」と感じている児童・生徒は1割未満(約30名程度)であるが、存在していることも着目すべき点である。

図表4 学校の勉強に対する意識(参加形態別、%)

	とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	まったく好きではない
選手(n=36)	8.3	55.6	27.8	8.3
関与強(n=155)	23.9	63.2	9.7	3.2
関与弱(n=98)	23.5	56.1	16.3	4.1

$\chi^2=13.12, df=6, p<.05$

↓  
国体の影響を受けていると感じている児童・生徒 289名(28.2%)

図表5 体育の授業に対する意識(参加形態別、%)

	とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	まったく好きではない
選手(n=66)	75.8	21.2	1.5	1.5
関与強(n=232)	61.2	33.2	5.2	0.4
関与弱(n=149)	71.1	21.5	4.0	3.4

$\chi^2=14.54, df=6, p<.05$

↓  
国体の影響を受けていると感じている児童・生徒 447名(43.7%)

### 3) 地域に対する意識

自分が住んでいるまちに対する愛着心について、国体が「とても影響している」「まあまあ影響している」と回答した者は901名(88.0%)と高い値を示した(図表6)。

総じて、「好きではない」という回答は皆無であり、参加の形態に関係なく、自分が住んでいるまち(地域)に対しては国体を通して愛着心を抱いていることが明示できる。とりわけ「関与弱」の児童・生徒は「とても好き」62.5%と、地域に愛着心を強く持っていることが確認できる。この結果から、「県民総参加」の号令のもと、全国からの参加者に対する全県的なおもてなし活動への参加が、岐阜県や自身の住む地域のロイヤリティを形成する契機となり得ることも予測できる。

図表6 地域に対する意識(参加形態別、%)

	とても好き	まあまあ好き
選手(n=108)	51.9	48.1
関与強(n=401)	51.4	48.6
関与弱(n=392)	62.5	37.5

$\chi^2=10.95, df=2, p<.01$

↓  
国体の影響を受けていると感じている児童・生徒 901名(88.0%)

### 4) 「社会性」の獲得

先行研究の知見から「国体に対する意識に留まらず」国体開催の意義を見出す指標として、児童・生徒の「社会性」の獲得に着目する。

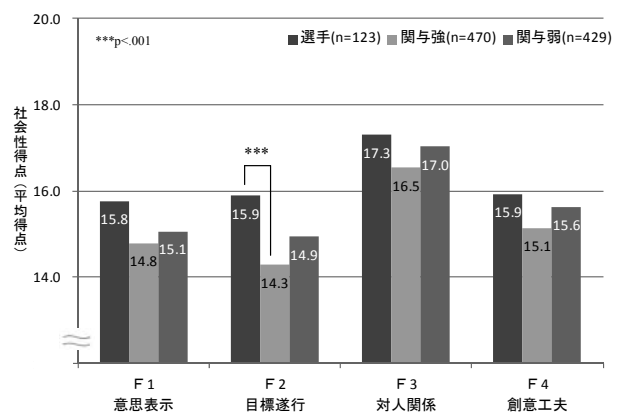
前述の通り、「社会性」を測定する尺度により「意思表示」、「目標遂行」、「対人関係」、「創意工夫」の4つの因子構造を明らかにすることができる。

#### ①国体への参加形態別にみる「社会性」の獲得

まず、国体への参加形態別による一元配置分散分析を行い、参加形態の違いが尺度得点にどのように反映されているかを検討した(図表7)。

結果、「選手」と「関与強」の間で「目標遂行」の獲得度に顕著な有意差( $p>0.001$ のみ図示)を確認できた。しかし、総じて、国体への参加形態別ではどの「社会性」においても獲得度に大きな違いは認められなかった。

図表7 社会性因子得点の比較(参加形態別)



次に、単に国体への参加形態だけではなく、練習・準備や本番の関わりに対する満足感や、国体の各種事柄に対する印象の残存性と「社会性」の獲得との関連を分析した。

#### ②国体関与への各種満足度と「社会性」の獲得

練習会や講習会に関する事柄(12項目)に対し「5.とても満足している」から「1.まったく満足していない」の5段階で回答を求めた(図表8 ※「選手」および「関与強」の児童・生徒への限定項目)。

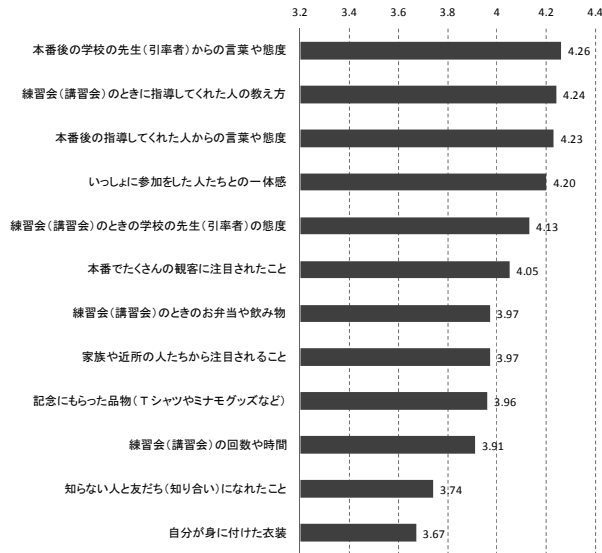
結果、引率者や指導者、一緒に参加した人たちへの満足度が高いことがわかる。

続いて、これら12項目の点数を合算し、満足度が高い群(高群)、中程度の群(中群)、低い群(低群)の3群に分類した(平均値  $48.6 \pm 0.5SD$ )。一元配置分散分析を行い、練習会や講習会への満足度が社会性の尺度得点にどのように反映されているかを検討した(図表9)。

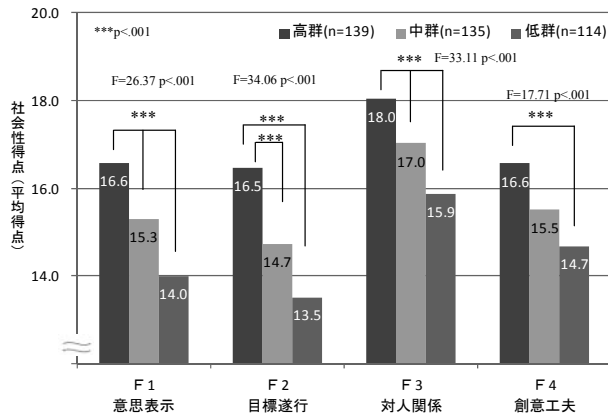
結果、練習や講習会への参加に対し、満足度が高

い者ほど各種社会性の獲得度も高いことが有意に示された ( $p>0.001$  のみ図示)。特に「対人関係」については、全体的に高い得点を示しており、満足度の上位項目でもある「引率者、指導者、一緒に参加した人たち」とのコミュニケーションとの関連性が示唆される。

図表 8 練習会や講習会に対する満足度(平均値)



図表 9 社会性因子得点の比較(参加満足度別、限定項目)



③国体の印象度と「社会性」の獲得

国体の各種事柄(15項目)に対する印象について、「5.とても残っている」から「1.まったく残っていない」の5段階で回答を求めた(図表10 ※“選手”および“関与強”の児童・生徒への限定項目)。

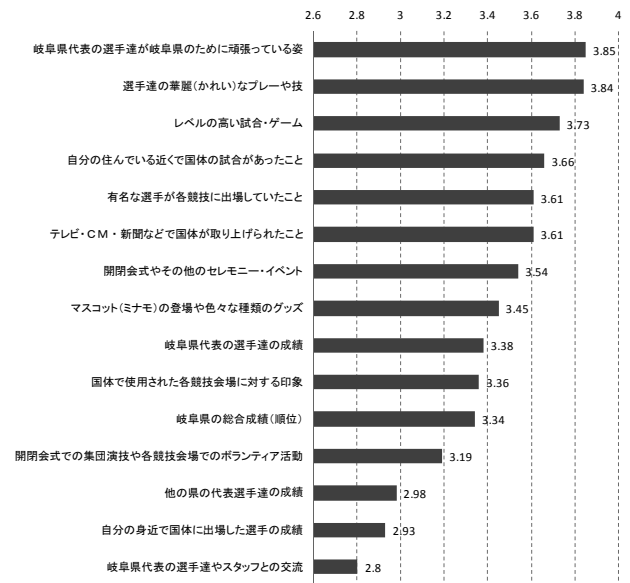
結果、選手の「頑張っている姿」、「華麗なプレーや技」、「レベルの高い試合」などが上位を占め、選手に対する印象が色濃く残っていることが確認できる。

続いて、これら15項目の点数を合算し、印象度が高い群(高群)、中程度の群(中群)、低い群(低

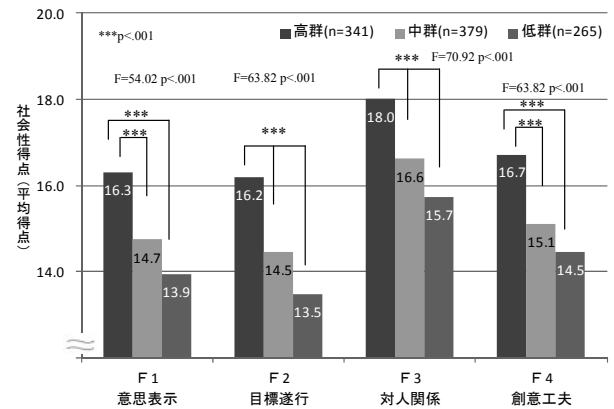
群)の3群に分類した(平均値  $51.4 \pm 0.5SD$ )。一元配置分散分析を行い、国体に関する印象度(印象の残存性)が社会性の尺度得点にどのように反映されているかを検討した(図表11)。

結果、国体に対する印象度が高い(多く残っている)者ほど各種社会性の獲得度も高いことが有意に示された ( $p>0.001$  のみ図示)。特に「対人関係」については、全体的に高い得点を示している。

図表 10 国体に対する各種印象度(平均値)



図表 11 社会性因子得点の比較(国体印象度別、限定項目)



上記①～③の結果から、国体に参加する児童・生徒は、参加の形態を問わず、練習・準備から本番までの満足感や、国体の各種印象度などが高まることで、社会性の獲得に何らかの影響を及ぼすことが示唆される。



#### 4-2. インタビュー調査結果

アンケート調査結果から、練習や準備への参加度、国体への印象が強く残っている児童・生徒を抽出し、各学校から許可された7名に対し、インタビュー調査を実施した(図表12)。調査においては、調査員2名による半構造化面接法を採用し、予め準備した質問項目を対話の展開によって適宜変更している。

図表12 インタビュー調査の概要

調査対象者	a…式典演技者(女性、小学4年生) b…式典演技者(女性、小学4年生) c…式典演技者、おもてなし活動実施者(女性、小学6年生) d…式典演技者、おもてなし活動実施者(女性、小学6年生) e…式典前演技者(女性、高校2年生) f…選手(男性、高校1年生) g…おもてなし活動実施者(男性、中学1年生)
調査期間	アンケートへの回答から3週間以内
調査方法	・調査員2名による半構造化面接法(一部、調査員1名) ・児童、生徒が所属する学校の一室にて40分程度
主な調査内容	・国体で最も印象残っている事柄 ・運動・スポーツに対する意識 ・学校の勉強、体育に対する意識 ・岐阜県や住んでいる地域に対する意識 ・国体を通じた自身の変化

インタビュー調査結果から主な回答を記述で箇条書きにまとめ、項目毎に分類し下記に列挙する。

また、アンケート調査結果と符合する口述や新たな視点等については下線で示している。

##### 1) 国体で最も印象残っている事柄

- (b) 太鼓の演技とか色々な演技が見られるからいいなあとと思った。最後に色々な楽器が出てきて、上級生が綺麗に移動するのがすごいなあと思った。一員だったのがすごくうれしい。
- (c) オリンピックでも出なかった水泳の世界新記録が出たことが一番の印象。学校で先生やみんなと話した。
- (d) 私は卓球をやっていて、〇〇高校にとっても強く憧れている姉妹の選手の試合を観ることができたことが印象強かった。
- (e) 式典前演技で、両陛下の前で演奏できることはすごいことだと思って臨んだ。こんなに大きい(普段の会場の4倍くらいの大ささの)場所で演奏したことがなくて感動した。
- (f) 地元開催が一番大きかった。小6の頃にターゲットエイジということで自分も出場できるかも知れないと期待していた。
- (f) 五輪選手と色々な話ができた。そういう選手に追いつきたい。正直なところ、国体が終わってからは競技へのモチベーションが下がったが、調整を重ねてきたから、不思議と記録は伸びる。だから、また頑張らないといけないって思う。

##### 2) 運動・スポーツに対する意識

- (a) バドミントンをすごくしたいが、近くで教えてもらえるところが無い。どこかにできたらすぐにでも通いたい。
- (d) 国体の演技の練習の後にお父さんとしか卓球をやっていなかったが、みんなから卓球のことを聞かれて、自分でもやって上手になりたいと思った。
- (g) 国体はお金もいらなかったのも、撮影したり、気軽にアドバイスがもられた。それから高校生の大会などに上手く時間を使い友達を誘って観に行くようになった。

##### 3) 学校の勉強、体育に対する意識

- (a) いろいろな市や県から人が来るから、「社会」が国体に関わっているような気がして、「社会」に興味が出てきた。一番苦手だけど。
- (a) 体育は好き。演技では走る場面が多かったから、足がちょっと速くなったなあとと思う。だから体育が楽しくなった。
- (c) 授業の時間を使って練習をすることが、逆に、選手を真面目に応援しようという本気モードにさせてくれる時間だったと思う。
- (d) 演技の待ち時間に勉強していたら、友達からわからないところを教えてくれた。協力してくれたり、教え合ったりしてくれると、勉強が楽しいということがわかった。
- (e) 球技が得意じゃないので、体育は積極的にはできないが、体育の授業で普段一緒に動いている友達が、国体に出ているのがすごいなあと思った。
- (f) 国体に関わるようになってから、勉強は「まあまあ好き」になった(落ちた)。勉強についていけなくなった。9月は始業式が始まっても、学校には3回しかいけていなかった。2ヶ月くらいは大変だったが、今は先生にも補習をもらったので大丈夫。準備から大会中は必死だが、今考えるともうちょっと勉強させてほしかったなあって思う。

##### 4) 岐阜県や住んでいる地域に対する意識

- (a) 演技の練習中に熱中症で倒れた子に高校生の人たちがうちの学校の上級生が「大丈夫?」って声をかけている場面を見て、人が優しいなあとと思った。
- (c) 岐阜県って結構田舎だけど、国体が開かれて今もすごく賑やかになった気がする。近所の人に声をかけられるし、自分から「おはようございます」って挨拶ができるようになった。



- (d) やっぱり、岐阜県出身の芸能人を見てより好きになった。国体ひとつでこんなに県民が集まってくれるんだなあっていうことが嬉しかったし、また岐阜県が好きになった。
- (f) 岐阜県が優勝して、岐阜県の底力を見た。しかし、やはり開催県が優勝するのだろうか。前回大会の岐阜県の総合成績も知らない。

## 5) 国体を通じた自身の変化

- (a) 仲間と協力できるようになった。班行動の時に声をかけられるようになった。以前は、仲が良い友達とだけ協力していたけど、今は大勢で協力できる。
- (b) 国体が終わった後のほうが、友達と協力できていると思う。外に出るときに帽子を忘れている子に教えてあげるなど、今までは言いつらかったけど、今は言えるようになった。
- (c) 声を出すのが苦手だったけど、開会式や閉会式で、自分達が応援を担当する県の人達に「頑張れー」と声を出すことで、自分の気持ちを伝えることができると思った。
- (d) 国体前は、帰るときも一人だったし、みんなに当たったりした。心を開いた友達にしか声をかけられなかったが、たくさん友達をつくることのできた。
- (d) 演技はペアだったが、協力する本当の意味がわかって日常生活でも協力することを頑張っていたら、交友関係も良くなった。
- (e) 自分からはあまり人にしゃべりかけないが、国体の練習の時に、あまり理解できていない子がいて困っていたので、自分から行動して教えてあげたことが、今の自分にプラスになったかなあと思う。人との関わりが増えた。
- (f) トレーニング方法とかストレッチを入念にすること。

## 6) 今後の国体への興味・関心

- (b) テレビでやっていたら見てみたい。
- (c) 他県に行ったことがないので、国体を通して行ってみたいなあと思う。
- (d) 別の県で競技を観てみたいと思う。毎回卓球はどうしても見たい。
- (e) 競技も気になるが、自分は式典前演技に出させてもらったので、今後、他の県がどのような演技をするのかがすごく気になる。

インタビュー調査の結果を概観すると、批判的な意見はほとんど聞くことがなく、自身の生活と結びついている回答が多い傾向にあった。

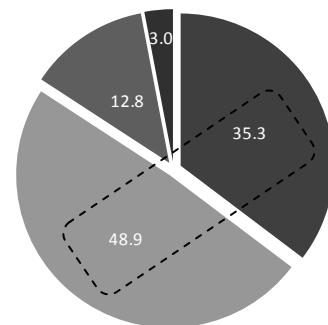
## 4-3. 保護者に対するアンケート調査結果

調査協力の承諾が得られた4校の児童・生徒の保護者(計480名)を対象にアンケート調査を実施した。アンケートの配布・回答・回収は各学校長の指示のもとに、学級単位で実施され、最終的に430名から有効回答が得られた(有効回収率89.6%)。

この調査は、学校や地域と共に、児童・生徒の最も身近な家族社会への影響の一端を把握することや、児童・生徒の変化に関する保護者からみた客観的な評価を得るため補足的に実施した。結果を一部抜粋し、報告する。

「岐阜国体に児童・生徒が関わるようになってから、自身はどのくらい国体に興味や関心が増えたか」について「大変増えた」から「全く増えていない」の4段階で回答を求めた(図表13)。結果、「大変増えた」35.8%「まあまあ増えた」48.9%と、8割以上の保護者が児童・生徒の関与に伴い、国体への興味・関心を深めていることがわかった。

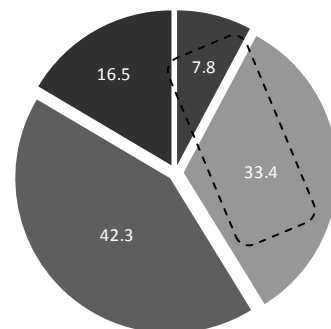
図表13 保護者の国体に対する興味・関心の変化(%)



■ 大変増えた ■ まあまあ増えた ■ あまり増えていない ■ 全く増えていない

また、「岐阜国体に児童・生徒が関わるようになってから、家族で運動・スポーツをしたり、観戦したりする機会が増えたか」について「大変増えた」から「全く増えていない」の4段階で回答を求めた(図表14)。結果、約4割の家庭において、家族間における運動・スポーツ機会の創出を確認できた。

図表14 家庭内における運動・スポーツへの関わりの変化(%)



■ 大変増えた ■ まあまあ増えた ■ あまり増えていない ■ 全く増えていない

児童・生徒の国体参加に伴う変化について、自由記述欄に様々な意見が記述された。肯定的・批判的意見に分類し抜粋した結果を以下に示す。

#### <肯定的意見>

- ・暑い中での練習などでも弱音を吐くことなく、努力する強さが身に付いた。
- ・とても心に残った様子で、ビデオを何度も見てはいろいろな話をしてくれる。
- ・練習が大変だったようだが、運動や体力作りの大切さを感じている。
- ・演技をする事に興味を持ち、ダンスを習い始めた。
- ・休日に国体の練習がある時は、普段ため込んでしまう塾の宿題を早めに終わらせようとする努力が見られた。

#### <批判的意見>

- ・練習期間が長すぎたので、「また練習」と嫌そうだった。汗で目が真赤になりすごく疲れていた。
- ・夏休みなど毎週のように練習があり、親としては大変だった。もう少し練習日数・時間を考えてもらえると良い。

#### 5. まとめ

本調査研究全体を通して得られた知見は以下の通りである。

- 1) 国体への参加形態に関わらず、児童・生徒は国体に関わることで運動・スポーツに対する意識を高める傾向がある。しかし、参加する活動によっては、「する」「みる」それぞれの嗜好を助長することも想定される。

⇒【仮説1】を棄却

- 2) 国体への参加形態によっては、児童・生徒の学習意欲の低下を招いており、特に“選手”が顕著であるが、“関与弱”の児童・生徒も例外ではない。

⇒【仮説2】を一部支持

また、国体への参加形態に関わらず、体育の授業に対しては意欲的な意識を持つようになる。

⇒【仮説2】を棄却

- 3) 国体への参加形態に関わらず、自身が住んでいるまち（地域）に対し、国体を通して愛着心を抱くようになる。

⇒【仮説3】を棄却

- 4) 国体への参加形態別では、どの「社会性」の獲得度にも大きな差異はみられない。しかし、練習・準備から本番までの満足感や、国体参加から受ける各種の印象度などが高まることで、社会性の獲得に何らかの影響を及ぼし日常生活に変化を与えることが示唆される。

⇒【仮説4】を棄却、【仮説5】を支持

- 5) 児童・生徒の国体参加を契機に、運動・スポーツを媒介とした家族間のコミュニケーションが創出されることが示唆される。

本研究では、国体との接点が「希薄」であった児童・生徒における学習効果の低さを想定した場合に、国体というスポーツイベントは一部の関わり合いの強かった者に対してのみの、いわば「局部的な教育効果」をもたらす可能性を探るには至らなかった。

今後は、「国体開催前の児童・生徒に対する教育的配慮点」や「国体開催後に求められる教育的配慮点」といった、国民“体育”大会が果たすべき教育的・社会的機能性について検討することも求められ、本報告がその一助となることを期待する。

#### 参考文献

- 1) ぎふ清流国体・ぎふ清流大会実行委員会：第67回国民体育大会開催方針
- 2) 原田宗彦・鴨井啓・富山浩三：国民体育大会に対する開催地住民の意識、体育学研究 37、pp. 305-313、1992
- 3) 神野賢治・谷口勇一：国民体育大会の社会的意味の検証と再考、日本スポーツ社会学会第18回大会抄録集、pp. 68-69、2009
- 4) 権学俊：国民体育大会の研究—ナショナリズムとスポーツ・イベント、青木書店、2006
- 5) 仲野隆士、丸山富雄、永田秀隆：国民体育大会の開催内定時期における開催地住民の意識：仙台大学紀要 28 (1)、pp. 1-10、1996
- 6) 岡本進・寄本明・佐藤尚武・比売宮了秀・沢田和明・前川和三：国民体育大会の支援的態度を規定する要因について、日本体育学会大会号 31、p. 211、1980
- 7) 山本浩二・内田若希・山崎将幸：高校生における社会性測定尺度の開発と部活動および学年間による差異の検討、岡山体育学研究 20、pp. 17-22、2013

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。